

P. 220 ~ 222

鈴木由告・清水長正：(1982) 秩父山地金峰山における化石周水河地形からみた森林限界 日本地理学会予稿集 21. P. 266 ~ 267

鈴木由告・秋山好則：(1984) 吾妻山系西大嶺西面における森林の垂直分布 福島生物 No 27 P. 7 ~ 11

鈴木由告：(1972) 東京都中野区のクヌギ・イヌシデ林 植物と自然 6, 11. P. 13 ~ 19

鈴木由告・秋山好則・小水内正明・高橋政利・千葉高男：(1982) 岩手山北面における森林の垂直分布

岩手植物の会会報 No 19. P. 1 ~ 10

山形県総合学術調査会：(1966) 『吾妻連峰』 P. 1 ~ 57 山形県

久野久：(1954) 『火山および火山岩』 255

P. 岩波書店

貝塚爽平：(1969) 変化する地形-地殻変動と海面変化と気候変化の中で- 科学 39, P. 11 ~ 19

守田益宗：(1984) 東北地方における亜高山帯の植生史について I. 吾妻山 日生態会誌 34, P. 347 ~ 356

〔新刊紹介〕 落合照雄「信州の湖沼」A 5 判 264 頁、信濃教育出版部、1984 年 6 月、1,200 円。

改めていうまでもなく、著者は教職にありながら長野県の湖沼、河川の生物学的研究に長年従事せられ、とくにプランクトン研究の業績は高く評価されている。本書は信州自然科学シリーズの第 5 巻として出版された。既刊のものが化石や陸上の生物についての内容であったので、水に関するものが待望されていた。このシリーズは、県内の小中学生に信州の自然について、分かり易く解説しようとする意図で発刊されている。山紫水明といわれた信州も戦後の開発や社会の発展に伴って大きく変化し、その言葉も色あせてきているが、その変化は水に関する自然にはっきりと現れている。著者は長年にわたって信州の水の中の生物を追いかけて、その激しい変化の過程を、冷静な科学者の目でとらえてきた。またそののみならず、湖沼の地学、水の物理、化学特性など幅広く湖沼全般にわたる研究をされてきた。それゆえ、いま本シリーズ、湖沼のテーマで最適任者の著者によって本書が発刊されたことは意義深くまた喜ぶものである。

本書は 10 章からなり、長野県各地の湖沼ごとにその生い立ち、そこに住む生物とその生態、さらに湖水の水質の現状とその変化の過程、原因を分かり易く解説する。第 1 章はよみがえれ諏訪湖というテーマで全体の 3 分の 1 のスペースが与えられている。それだけ諏訪湖が県民に大きい関心を持たれているばかりでなく、研究が進んでいるということであろう。最後の章で湖沼を小宇宙としてとらえ湖沼の生態系についてやさしい解説がなされているので、この章から読みはじめてもよいだろう。

著者の多数の研究と、多くの資料によって裏づけられた内容は、説得力がある。信州の水問題の入門書として多くの人に本書をすすめたい。(K. T. 生)

〔植物ニュース〕 77. クロユリ *Fritillaria camtschaticensis* (L.) Ker-Gawl.

本誌 16 号 61 頁 (植物ニュース 70) に、クロユリは雄性異株であり、標本室における検定の結果は、雄株が両性株を上廻ることを報告した。その後、野外の集団における性分布を確認してみたいと思っていたが、昨年 8 月の南アルプス調査の折、荒川小屋・大聖寺平間標高 2,650 m 前後の礫斜面に相当数のクロユリが群生しているのをみた。早速、同行の相原英二・大野晋両君とともに、開花中の株について性表現を調べてみたところ、次のような結果を得た。

総数 258 茎 (地下部は調べていないので、すべて独立株か否かは不明)

1 茎 1 花は 253 茎 $\sigma : \varphi = 216 : 37 = 5.84 : 1$

1 茎 2 花は 5 茎

2 花とも雄花は 2 茎、2 花とも両性花は 2 茎、雄花と両性花は 1 茎

つまり、雄株が両性株に比べてはるかに多いこと、2 花をつける場合は性表現が互いに異なることもあり、したがってクロユリはげんみつには雄性異株とはいえないことが確かめられた。

一方、松本市のある山草店所有の北海道産と称する鉢植えの開花中のクロユリ 7 鉢をチェックしてみた。いずれも草丈は 30cm を越える大型の株であり、根ざわから 2 本の地上茎を立て、1 茎当り 1 花のもの 1 茎、2 花のもの 11 茎、3 花のもの 2 茎であった。これら 7 株 14 茎の花の性分布は

$\sigma - \sigma \sigma$, $\sigma \sigma - \sigma \sigma$, $\sigma \sigma - \sigma \sigma$, $\sigma \sigma - \sigma \sigma$, $\sigma \sigma - \sigma \sigma$, $\sigma \sigma - \sigma \sigma$, $\sigma \sigma - \sigma \sigma$

であり、雄花：両性花は 12：17 で両性花が多く、7 株中、雄花および両性花をつけるもの 3 株、雄花または両性花のみをつけたものはそれぞれ 2 株である。集団または個体の成熟度が性頻度に関わるものかどうか確かめる必要がある。(清水建美)